

# 矢作川研究No.14の発刊にあたって

豊田市矢作川研究所 所長  
柴田一美

日頃、市民の皆様をはじめ多くの方々から、矢作川研究所の運営に対し多大なご支援、ご指導、ご協力をいただき誠にありがとうございます。研究所は昨年節目の15年目を迎えました。また年報「矢作川研究」も第14号を発刊することができ、これもひとえに、研究所を支えてくださいました関係者の皆様のご助力の賜と感謝しております。

矢作川研究所は平成6年7月に「良く利用されなお美しい矢作川の創造」を目指して設立されました。発足当時の調査は主任研究員が中心となり共同研究員として参画した多くの専門家と連携して進められてきました。水質や生物相の変化、アユの不漁、河床変化や糸状藻類の繁茂等に対し、それぞれ専門の切り口で調査研究を行ってきました。

アユの生態につきましては、平成8年に地元のアユ釣りや淡水魚の愛好家によって組織された矢作川天然アユ調査会が天然アユの復活を願って生態調査や環境調査等積極的に取組んできました。現在約70名の会員が活動しています。

矢作川研究所の設立主旨は、矢作川の流量と水質を将来にわたって保全していきたいというものです。その前提には、水源域は勿論、河口周辺海域を含めた流域全体の自然生態系が健全でなければならないという思いがあります。15年が経ちますがその思いは変わることはありません。その間、自然に親しむ人々が増え、流域各地には矢作川愛護の市民団体が誕生するなど、年々矢作川への期待は高まるばかりです。そんな中、関係機関はもとより、各団体とも連携を深め、地域に根ざした活動を重視して取り組んでいます。

しかし、ここ数年、この川の中では、カワシオグサ、カワヒバリガイ、オオカナダモの異常繁殖など次々に問題が発生し、矢作川の環境について解決すべき問題が多くみられるようになりました。

平成21年度は、そうした状況の中、ひとつひとつの課題に対して地道に調査・研究、実践活動を展開してきました。カワヒバリガイの大量発生・大量死と餌資源との関係、良質かつ豊富な付着藻類の確保、回遊魚類を代表とするアユの生息調査や資源保護に向けての提言、そして河畔林等の保全及び整備のための基礎調査を実施するなど、矢作川の健全な河川生態系を回復するための提案を行ってきました。矢作川研究所は、こうした生態調査・研究の成果を広く市民に知っていただくことにも力を注いでまいりました。月報「Rio」の発刊や、今年COP10が開かれる名古屋でのシンポジウムの開催、また多くの流域住民や関係機関等が参加した矢作川「川会議」の開催、「矢作川学校」として、出前講座などを小中学校の総合学習や地域の一般市民向けに実施したり、さらに、これらの取組みを発展させた高校生、大学生による矢作川学校ミニシンポジウムを今年も行いました。

水がぬるむころになると、川に入って水浴びしたり、魚釣りした幼いころの思い出をふるさとの川「矢作川」にはせて懐かしむ人も多いと思います。これからの子どもたちが川に背を向けることなく、矢作川が母なる川、として流域住民に親しまれるよう、今後とも一層国、県等関係機関や諸団体と連携を密にするとともに、現在取り組んでいる調査研究成果がより良い河川事業に向けて提言できるよう所員一同頑張っていく所存でありますので、皆様には今まで以上のお力添えをよろしくお願いいたします。